

文化財 ニュース

10 Summer 2016



Index

- 2-3 平成28年度千代田区指定文化財
- 4 常盤橋門跡と明治の石橋・常磐橋の修理
- 5 江戸城外堀跡(赤坂門)・紀州藩邸跡と旧李王家東京邸の整備
- 6 史跡散歩 東京駅で起きた重大事件
～首相襲撃事件～
- 7 収蔵庫から(区内文化財)
神田明神境内の石造物調査
- 8 常設展・資料紹介「徳川盛世録」

千代田区 新指定文化財特集号 平成28年度 千代田区指定文化財

新指定

有楽町一丁目遺跡出土松平藤井家
関係資料

追加指定

三谷家美術資料
三谷家文書



平成28年度千代田区指定文化財に 3件を指定しました

千代田区教育委員会では、平成28年4月1日付で、新たに3件を文化財として指定しました。

今回新たに指定をしたものは、有楽町一丁目遺跡出土松平藤井家関係資料1件(319点・有形文化財・考古資料、千代田区教育委員会所蔵)、すでに指定されている文化財の追加指定は、三谷家美術資料1件(4点・有形文化財・絵画・書跡、千代田区教育委員会所蔵)と三谷家文書1件(186点・有形文化財・歴史資料、千代田区教育委員会所蔵・個人所蔵)となります。

これで、昭和61年(1986)に初めて文化財指定をして以降、合計で79件を指定しました。

有楽町一丁目遺跡出土資料<写真右上>
三谷家美術資料「掛軸(鍾馗図)」<写真左上>

表紙で紹介した平成28年4月1日付で文化財指定した3件について、その概要を紹介します。

有楽町一丁目遺跡出土松平藤井家関係資料

この資料は「有楽町一丁目遺跡」の発掘調査によって出土した遺物のうち、譜代大名の松平藤井家の屋敷に関する資料319点を指定しました。

この遺跡の明暦3年（1657）大火層の下層から、松平藤井家屋敷跡に関する遺構や遺物が多数出土しました。松平藤井家は、徳川家康の四代前の松平長親を祖とし、二代信一は家康に仕えて多くの戦功をあげて丹波篠山5万石などを拝領しました。調査地は、慶長13年（1608）頃から天和3年（1683）まで屋敷として拝領しています。

この遺跡からは、江戸遺跡としては出土例がほとんどない金箔瓦や装飾部材、一括性が確認できる「揃い」の陶磁器が出土しています。これらは、絢爛な大名屋敷の一端を知ることができる資料といえます。

■瓦（金箔瓦を含む）

遺跡からは江戸時代初期の瓦がまとまって出土し、とくに平らに敷きつめた瓦敷からは金箔瓦がたくさん見つかっています。江戸遺跡でも金箔瓦の出土例はありますが、その多くは破片で、この遺跡のように17世紀初頭の高箔瓦を含む瓦がまとまって出土したことは極めてまれな事例といえます。

■装飾部材

側板と蓋を伴う木組の下水溝から、大形のものと同小形のもの、それぞれ1枚ずつ出土しました。2枚とも、良質のヒノキ材で、表面全体には黒漆が塗られ、絵様部分には金箔が押されていました。この部材は、『江戸図屏風』に描かれているような寛永期の大名屋敷を構成する建築部材の一部で、華やかな安土桃山風の建築物が存在していたことを示す資料といえます。

■明暦の大火罹災の陶磁器類

中国の景德鎮、福建・広東、漳州窯などの舶来品のほか、肥前の磁器が出土しています。とくに景德

鎮磁器を多く含んでいます。同一器形・同装飾のいわゆる「揃い」のものが多数含まれているため、この資料から揃いの皿が復元でき、また保有されたセットの状況を知ることができます。

江戸の大名屋敷は、江戸時代初期には江戸図屏風に見られるように門や殿舎に漆や金箔を施すなど豪華絢爛な造りが多かったですが、のち華美な屋敷の建設は禁じられていき、明暦3年（1657）の大火によりその多くが焼失してしまいました。

そのため、江戸時代初期における江戸の大名屋敷やその生活実態は依然不明な点が多くあります。そのような中で、この資料は、桃山風様式のなごりを残す慶長から寛永期における江戸の大名屋敷の建築の一端と、食膳具の実態を知ることのできる貴重な資料といえます。また、千代田区に限らず、広くは江戸時代の歴史を考える上でも重要な資料といえます。

（小杉由希子）



有楽町一丁目遺跡出土金箔瓦



有楽町一丁目遺跡出土の揃いの磁器皿（景德鎮窯）

平成28年度千代田区指定文化財

三谷家美術資料

今回追加指定した資料は、①掛軸（白）、②掛軸（亀田鵬斎書）、③画帖、④掛軸（鍾馗図）の4点で、平成20年度指定と合わせて518点の資料となります。

■「飛鳥図（柴田是真筆）」

絹本で、画帖に貼り込まれています。「行年七十九翁 是真」とあることから、柴田是真（1807～91）が明治18年（1885）に描いたものです。

是真は両国の生まれで、江戸時代末期から明治中期にかけて活動した人物です。漆工家・日本画家で、日本の漆工分野において、近世から近代へ橋渡しする役割を果たしたといわれています。

■「掛軸（鍾馗図）」

絹本で軸装されています。三代歌川豊国の肉筆画です。青鬼を捕えた鍾馗の姿が描かれ、「香蝶楼豊国画」の署名と「豊国」の捺印があります。

これらの絵画資料からは、紀伊国屋三谷家と浮世絵師である三代歌川豊国、日本画家である柴田是真、書家の亀田鵬斎らとの交流関係をうかがい知ることができます。

幕末～明治中期の三谷家の文化的交流を示すもので、作品そのものの価値だけではなく、神田地域の商家の文化活動を伝える貴重なものといえます。



飛鳥図（柴田是真筆）

三谷家文書

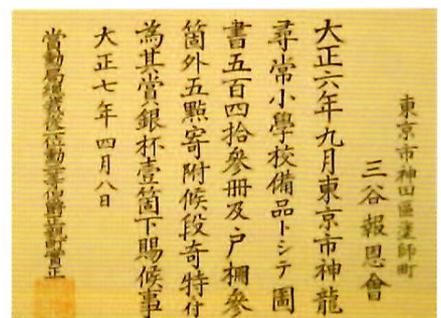
今回追加指定した資料は、神田の商家三谷家に伝来した資料群のうち古文書・記録類186点で、平成19年度指定と合わせて1,028点の資料となります。今回指定の文化財は、以下に分類できます。

- ①江戸後期から明治初期の金物問屋紀伊国屋の取引に関するもの
- ②三谷長三郎時代（明治中期～昭和初期）の経営に関する帳簿類
- ③三谷報恩会の経営記録（明治中期～昭和10年代）
- ④家に関する記録類（江戸後期～昭和20年代）

三谷家十代目長三郎は、これまでの指定文化財によって、神田地域の小学校などに多くの寄付をした人物として知られており、現在でも彼の教育面で果たした功績やその人柄が地域の人々に語り継がれています。戦前の株式会社三谷本店の系譜を引く伸銅品問屋が現存するため、経営面に強い関心が注がれてきました。

本資料のうち、株式会社三谷本店・三谷合資会社の帳簿・記録類は、十代目時代の経営状況を詳細に伝えるものとして非常に重要なものといえます。また、江戸時代～明治初期の家や経営に関する資料は、江戸・東京の中心部の商家のものとして、このようにまとまったものが現存している事例は少なく、稀少性があるとともに、一部の日記類などからは、幕末維新期の地域の動向を知ることができる豊富な内容を含んでいます。

江戸時代後期から昭和20年代までの一括性をもった資料群として、残存資料が少なく断片的にしかなることができなかった神田地域の商家の様子を伝える貴重なものといえます。（高木知己）



三谷報恩会あて
感謝状

常盤橋門跡と明治の石橋・常磐橋の修理

平成23年に発生した東日本大震災によって常盤橋門跡の石垣及び明治10年架橋の常磐橋が損傷を受けたため、千代田区ではこれらの解体修理を実施しています。文化財ニュースでは、これまで工事に伴う文化財調査によって明らかになった成果を報告しております。今回は、明治の石垣の裏から発見された江戸時代の橋の遺構を紹介します。

■常盤橋門の橋台石垣と木橋の遺構

この門のある場所は、室町時代の江戸湊みなとにあたる「高橋」に該当するといわれ、近世には大手門から常盤橋門・浅草橋門と続く本町通り（奥州道）にあり、江戸城外郭の正門にあたります。門の創設は慶長年間に遡り、現在みられる枡形石垣は寛永6年（1629）に奥羽の大名によって築かれたものです。門は、明治6年（1873）に撤廃されますが、多くの石垣は関東大震災後まで残されていました。現在は一部消失したものの高麗門脇の土手から渡櫓台までの石垣や濠沿いの石垣が良好に保存され、江戸城外郭のなかでは最も石垣が良好に残る城門跡となっています。

門に伴う木橋は、明治10年（1877）の石橋（常磐橋）架橋に伴い、橋台とともに撤去されてしまいました。今回の石橋解体調査によって明治期の石橋内部から江戸期の橋台（橋を支える石垣）と橋脚が発見されました。江戸中期の「江戸城御外郭御門絵図」によれば、この橋は長さ20間・幅4間7尺で、3本一組で6組、計18本の木杭で支える構造でした。今回発見された木橋橋脚は、右岸で5本（3本二組）、左岸で2本が発見されました。この橋脚は、直径約

約45cmの丸太を10～12面に面取りしており、先の史料から先端を尖らせた木杭になっていると考えられます。

橋台の石垣は、小面約60cmの築石を打ち込みはぎで築いており、3段が発見されました。また、橋台石垣と高麗門石垣が接する部分に朱墨で「大角止」「巻根止」「巻止」と記され、いずれも取り付く部分に縦の朱線が引かれています。これは江戸時代の石垣構築時に隅角と裏込めを計画した線と考えられます。

■文明開化期の石橋デザイン

明治時代のはじめ、東京の近代化の象徴として城門に架かる木橋は石橋に架け替えられていきます。その中で常磐橋（橋名は「磐」）は、小石川門の石垣石材を使って、二連アーチ石橋が架けられました。

当時は白い大理石の親柱や路面の花崗岩、洒落たデザインの高欄手摺柵など、ほかの石橋に比べてかなり特徴ある橋でした。今回の修復工事では、関東大震災と東日本大震災で被災した、これらの部材を様々な資料をもとに創建当時の文明開化の面影を取り戻したいと考えています。（後藤宏樹）



江戸時代の常盤橋門の遺構



修理した親柱（「常磐橋」と刻まれている）

江戸城外堀跡（赤坂門）・紀州藩邸跡と 旧李王家東京邸の整備

千代田区紀尾井町1番一帯は、近世の江戸城外郭門のひとつ赤坂門と紀州藩麹町邸跡に位置し、近代には皇族の屋敷となります。東京ガーデンテラス紀尾井町（旧グランドプリンスホテル赤坂）の開発にあたり、赤坂門と紀州藩邸跡の発掘調査、旧館（李王邸）の文化財指定および保存と活用が行われ、この地区の歴史を体感できる空間として整備されました。

■江戸城外堀跡と紀州藩麹町邸の遺構

現在、青山通り（国道246号）と弁慶濠沿いに赤坂門枘形石垣が保存されています。開発にあたる北側の敷地では紀州藩邸の石積み水路跡や御殿の基礎と思われる大規模な礎石、地下室などを発掘調査しました。紀州藩麹町邸は、現在の紀尾井町1番を含む約56,000㎡という広大な敷地を所有し、今回の開発地は、五代将軍綱吉を迎えた御成御殿おなりが建設された場所にあたります。

今回の開発にあたって、発掘調査によって発見された赤坂門石垣を地中下に保存するとともに、近代以降埋められた部分を再掘削して、赤坂門の地形を復元するとともに再度石積みをして路面標示で門の範囲を復元しています。また、紀州藩邸の石積み遺構は一旦解体し、出土した位置で石を積み直してモニュメントにして再利用しています。



赤坂門の石垣（弁慶濠沿いの展望台から望む）

■旧李王家東京邸

明治維新後、旧江戸城が皇居と定められると、宮家の人々も相次いで東京に移住することとなり、明治10年代以降、紀尾井町にある旧幕府の親藩・譜代大名の広大な屋敷跡が宮家の邸地に定められました。明治12年（1879）に伏見宮邸が旧彦根藩井伊家屋敷跡、北白川宮邸が紀州藩徳川家屋敷跡に移転しました。

北白川宮邸が明治45年に芝区高輪南町に移転すると、その跡地は関東大震災直後の大正13年（1924）に旧李王家の屋敷となりました。現存する建物は、大正15年から昭和4年（1929）にかけて設計され、昭和5年に竣工しました。本館は、鉄筋コンクリート造2階建て、入母屋造一部切妻造スレート葺きで、イギリスのチューダー様式を基調としながらも様々なデザインを取り入れた外観を持つ建物です。

戦後はグランドプリンスホテル赤坂旧館として利用され、幾度かの増改築が行われてきましたが、主要部分は創建当時の状態を留め、意匠的な特徴を十分に保ち、大正末から昭和初期の典型的な皇族（王公族）の邸宅を示すものとして、東京都の文化財に指定されました。さらに創建当時の資料をもとに照明器具や外壁などの主要部分を当時の状態に復元し、紀尾井町のランドマークとしても親しまれてきたこの建物は「赤坂プリンス クラシックハウス」（7月27日オープン予定）として公開されます。

（後藤宏樹）



旧李王家東京邸（都指定文化財）

東京駅で起きた重大事件～首相襲撃事件～

東京駅丸の内駅舎は、かつて、南口が乗車口、北口が降車口として使用されていました（中央口は、皇室専用口でした）。南口では、自動車から降りて列車に乗り込む間の、警備が手薄となった状況を狙って要人を襲う事件が起きています。

丸の内駅舎は、平成15年に重要文化財（建造物）に指定され、そののち修理が行われ、戦時中の空襲で焼失し仮改修された南北出入口のドーム屋根も、八角屋根からドームに復元されました。

丸の内駅舎には、北口・中央口・南口の3ヶ所の出入口があります。このうち南口付近では、原敬（1856～1921）・浜口雄幸（1870～1931）の両首相が暴漢に襲われています。

原敬殺害事件

大正10年（1921）11月4日、原敬首相は、京都で開催される立憲政友会の京都支部大会へ向かうため、東京駅に降り立ちました。改札口に向かったところ、短刀を手に突進してきた暴漢に襲われました。原首相はその場に倒れ、駅長室まで運ばれて手当てを受けましたが、すでに死亡していました。

原首相を襲ったのは、鉄道省山手線大塚駅職員の中岡良一という青年で、以前から原首相に対して批判的な意識を持っていました。

襲撃現場である現丸の内南口には表示があります。乗車券券売機の左側壁面には、事件の概要を記したプレートがあります。また、その前の床面には、円の内部に六角形が入ったマークが埋め込まれています。

浜口雄幸襲撃事件

昭和5年（1930）11月14日、浜口雄幸首相は岡山県で行われる陸軍特別大演習の視察と、昭和天皇の行幸への付き添いなどのため、東京駅に降り立ちました。改札口に入り、階段をのぼってホームを移動していたところ、至近距離から銃撃され、負傷しました（一説には、列車への乗車を撮影する報道陣のフラッシュ音で、発射音がかき消されたともいわれます）。浜口首相は、駅長室に運び込まれて応急手当てを受けました。のち、東京帝国大学医学部附属病院に搬送され、手術を受けて一命を取り留めています（その後、退院しますが、無理をして国会に出席したため、病状悪化して死去しています）。

浜口首相を襲ったのは、愛国社社員の佐郷屋留雄さごう やとめ おという人物で、「（浜口首相は）社会を不安におとしめ、陛下の統帥権（軍隊を指揮する権限）を犯した。」と供述しています。

襲撃現場にあたる位置は現在の10番ホームですが、ホーム上に目印はありません。真下にあたる丸の内南口通路から新幹線改札に向かう広場の柱に事件の概要を記したプレートがあります。また、その前の床面には、マークが埋め込まれています。

（高木知己）



原敬襲撃現場のプレート



浜口雄幸襲撃現場のプレートとマーク



今号の文化財ニュースは、日比谷図書文化館常設展資料のうち、「川室 将軍の城づくり」の映像で紹介している『徳川盛世録』を取り上げます。

著者である市岡正一は、旧幕臣でしたが、明治維新後に政府の民法編纂局の書記官として採用され、百冊を超える法令集を纏めています。明治 30 年代には大久保村村長、豊多摩郡会議員を歴任しています。

展示映像でも紹介しているように『徳川盛世録』は、将軍宣下など江戸城内の行事や、大名行列、武家の装束など江戸幕府に関する事績が豊富な挿絵とともに掲載されています。

この書物が刊行された明治 22 年 (1889) というと、家康が江戸に入部した天正 18 年 (1590) から数えて 300 年を迎えようとする年で、「東京開市三百年祭」が挙行され、また前後して多くの江戸回顧の出版物が生まれた時期でもありました。市岡は、薄れゆく徳川の世の記憶に対して、旧幕臣としてこの著書を著したのでしょうか。「徳川の城づくり・まちづくり」を語る上での格好の人物として、この展示室を彼が紹介しています。

(後藤宏樹)



バーチャル侍は、『徳川盛世録』に収録されている挿絵から引用しています。



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
 東京メトロ ●千代田線
 ●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
 ●丸ノ内線
 駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10:00～22:00
 土 10:00～19:00
 日・祝 10:00～17:00
 文化財事務局 月～金 8:30～17:15
 ※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。

休館日 毎月第3月曜日
 年末年始
 特別整理期間

文化財ニュース 第10号 (2,000部)

発行日 平成28年6月23日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務局
 〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
 TEL: 03-3502-3348 FAX: 03-3502-3361
 HP: <http://hibiyal.jp/bunkazai/index.html>
 e-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

印刷 株式会社 報光社